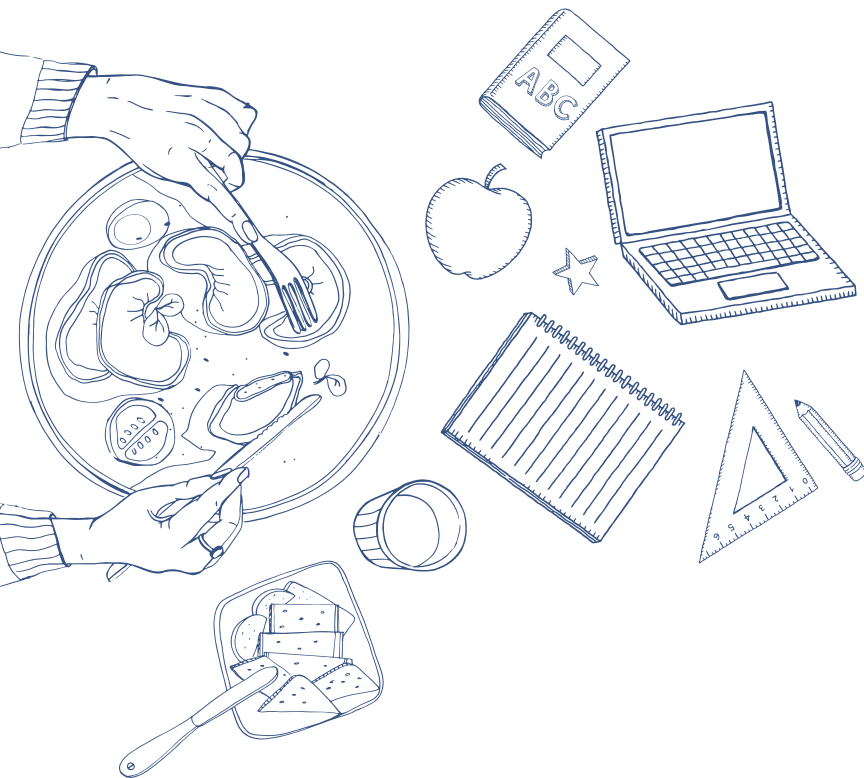




Did you Know?

フィンランドでは、学校の給食は無料です。
1948年に世界で初めて、温かい昼食を毎日
生徒に無料で提供しはじめ、現在も続いています。

本誌記事、各執筆者の責任に基づいて書かれています。
参考資料としてご自由にお使いください。
お問い合わせ用メールアドレス: sanomat.tok@formin.fi

SUOMI
FINLAND



フィンランド の教育

成功への道



すべては学校から始まる

人類が生き残って成功を収めるための主なる課題は、現在と未来の難問に対応できる教育を開発することです。世界中の意思決定者と専門家が、教育を提供するうえで最善なソリューションを必死で探しています。フィンランドの教育システムに対して注目が高まっているのは、国際的な学力調査でフィンランドがトップクラスの結果を出しているからです。

フィンランドの教育が強みとしていることのひとつは、社会的・財政的な背景に関わらず、あらゆる人々に平等な機会を提供していることです。基礎教育の焦点は、競争や比較ではなく、1人ひとりの生徒を個人としてサポートし、導くことです。

教師は高度な訓練を受けながら修士号を取得し、教師という職業も社会的に高く評価されています。

幼児向けの教育は、子どもたち本来の長所に焦点を合わせ、安心感および生活や社交に役立つ情緒的スキルの発達をサポートします。教師は生徒を勇気付け、やる気を引き出します。高学年になるまでは、成績を数字で評価しません。

総合学校で基礎教育を終えたら、興味と希望に従って普通高校や職業高校に進学する機会が誰にでもあります。さまざまな形式で生涯にわたって学習を継続することが可能です。フィンランドではプレスクール（就学前教育）から大学まで、無償で教育を受けます。

これがフィンランドでどのように行われているのか、フィンランド教育の背景にはどんな理念があるのか、これから紹介していきます。

フィンランドの学校へようこそ！

目次

- 01 フィンランドの教育制度
- 02 生涯にわたる学習
- 03 学校で何をどう学ぶか
- 04 より良い教育を実現させるために
- 05 フィンランド教育の最新事情
- 06 未来に向かって

Suomi
Finland
100

発行 2017年。フィンランド外務省、
駐日フィンランド大使館広報部
執筆 サツラ・コルペラ
製作 Otavamedia OMA
翻訳 ホンヤク社
印刷 耕文社
写真 Visit Finland, Otavamedia,
Ilari Nummi,
フィンランド教育文化省



無償で平等な
高品質の教育を
すべての人々に

01. フィンランドの教育制度

生涯のあらゆる局面で、すべての人々に教育を

フィンランドの良質な学校制度の基盤になっているのは、人材こそが最も重要な資産だという国民の精神です。

国民には、自分の可能性を最大限に高め、夢を実現したり希望の仕事に就くうえで役立つ、優れた教育を受ける権利があります。

このような理念のおかげで、フィンランドは独立後 100 年の間に、世界で最も貧しい国のひとつから、最高の技術的専門知識をもつ世界有数の裕福な国へと変貌しました。フィンランドは過去数十年にわたって大胆なソリューションを導入してきたため、自国に住むあらゆる人々に生涯学習と自己開発の機会を提供する制度を開発できました。

実際には、教育費はすべて税込で賄われています。授業料と引き替えに優れた教育を提供する私立学校は、事実上存在しません。民間が運営

する教育機関も少数ありますが、公立学校と同じ目標と基準を忠実に守っており、公的資金で運営され、入学生の選抜方針も同じです。教育への支出は公的資金全体の 11%強を占めています。

基礎教育は9年間続きます。総合学校（日本の小学1年生から中学3年生までに相当）で教える内容については、全国的なコアカリキュラムで指針が定められています。自治体は地域内に居住するすべての子どもに義務教育を提供する責任があります。また必要に応じて、幅広い学習や福祉支援サービスも提供されます。基礎教育が始まる前段階として、質の高い幼児教育と保育も全員が受けられます。

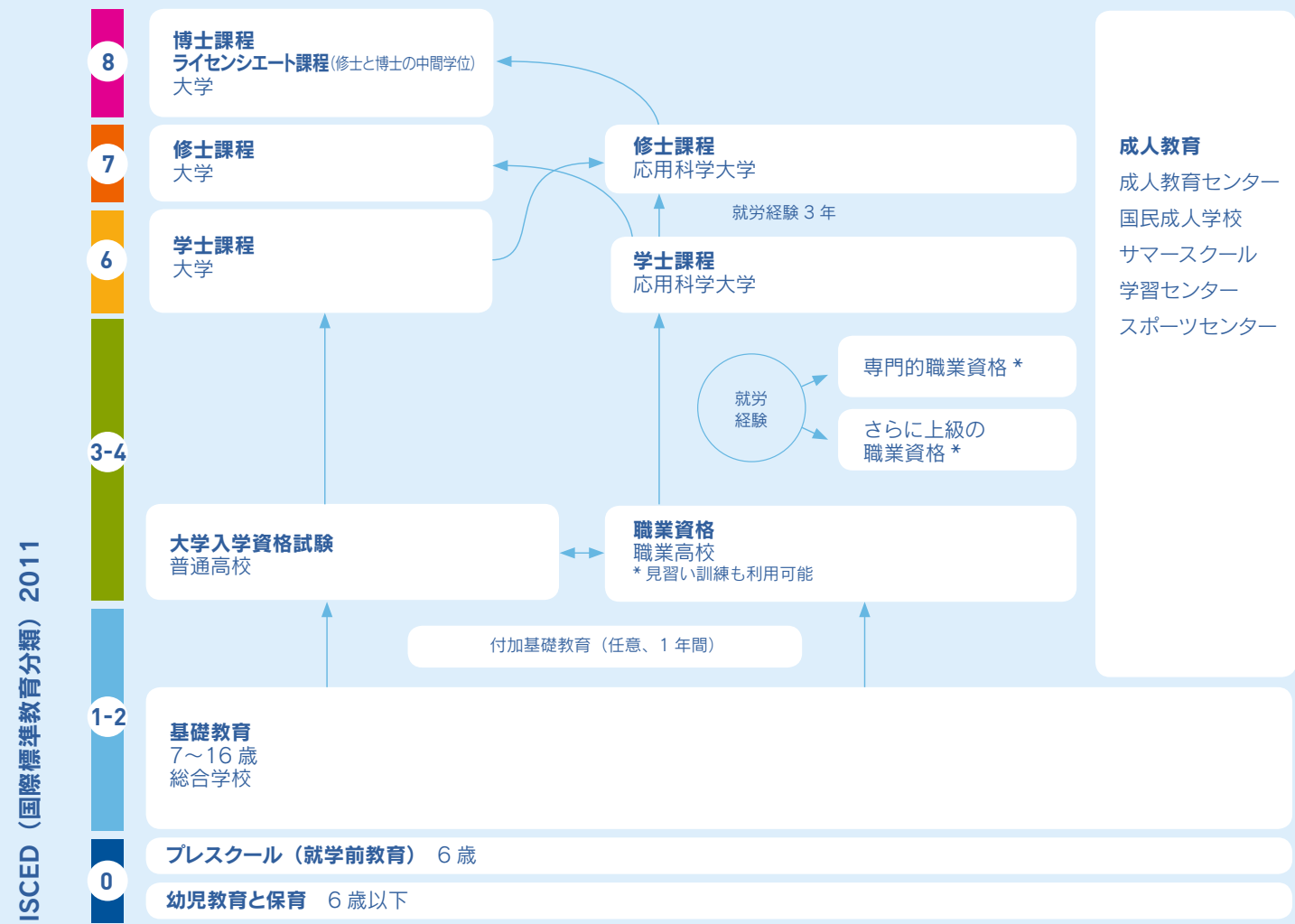
総合学校修了後は、普通高校が職業高校のいずれかに進学できます。どちらも期間は3年ほどで、一般的な教育に加えて、個人の興味と希望に従って学習できる幅広い機会が与えられます。20～24 歳のフィンランド国民の 76% 以上が大

学入学資格試験に合格、あるいは職業高校で職業資格を取得しています（2015 年のデータ）。いずれの場合も、大学または応用科学大学に進学する資格を得られます。

フィンランドには 14 の大学と 25 の応用科学大学があります。フィンランドの労働人口の約 41%が高等教育を受けています。世界や働き方の移り変わりに対応できるよう、人生のさまざまな段階で社会人教育と再訓練を受ける機会を設けています。

また誰にでも、成人教育機関で知識とスキルを向上させる機会が与えられ、語学や織物から IT やダンスにいたるまで、幅広いジャンルが用意されています。

フィンランドの教育制度



02. 生涯にわたる学習

プレスクールから最高レベルの高等教育機関まで、フィンランドに住む人々は生涯を通じて無償で教育を受けられます。これからのページでは、フィンランドで得られる様々な進学ルートについて紹介します。

幼児教育と保育 プレスクール

遊びと保育で、入学準備

フィンランドの子どもは比較的遅い7歳で、小学校に入学します。子どもが成長して発育するためには時間と空間が必要だというのが、国民的な信念だからです。フィンランドでは敏感な発育期を好機と捉え、自分で考えて創造性を発揮するよう子どもに促します。

幼児期の子どもは、親による世話を受けられる一方、保育園（日本の保育園・幼稚園両方に相当し、0歳から入園可能）の恩恵も受けられます。保育園では遊びや運動、屋外活動を通じて、集団活動を学んでいきます。

幼い子どもを持つ親は、長期の家族休暇を取得する権利があります。保育園の運営も自治体か民間、また保育者の自宅で行う少人数グループか、規模が大きい施設を選べます。保育園は

国から大きな財政支援を受けており、利用料は世帯所得によって変わります。自治体が提供する幼児教育・保育サービスには教育的な目標があり、職員になる条件は法律によって決められています。また保育園で教える教諭は、大学で修士を取得しています。

6歳になるとプレスクールに入ります。保育園が学校内にあり、子どもたちの社会的スキルと健全な自尊心を育て、小学校入学に備えます。幼児保育の内容には国家基準があります。自治体は必要に応じて、家庭からの送迎を提供する義務があります。

必要な場合は、子どもの就学準備の度合いを確認するテストが行われ、入学時期を1年早めたり遅らせたりすることもできます。

全国民に共通する基礎教育

必要な知識とスキル

フィンランドの子どもには学校で教育を受ける義務があります。義務教育は子どもが7歳になる年に始まり、9年間にわたる総合学校の学習計画を終えるか、義務教育を10年受けた後に終了します。また移民などの成人も、基礎教育を受けられます。

基礎教育の目標は、個人および社会の一員としての成長をサポートするとともに、重要な知識とスキルを教えることです。基礎教育は全国民に均等な進学機会を提供し、無償で行われます。学校で使われるすべて道具や文房具、教材も、生徒には無料で与えられます。

基礎教育を提供する責任は自治体にあります。そのため子どもがいる家庭の周辺には、総合学校が設置されます。総合学校には、1つの校舎内に9学年すべてが入る学校や、1～6学年と7

～9学年が別校舎になっている学校があります。地方では生徒数が数十名しかいない学校がある一方、都市部では1000名を超える場合もあります。学校の規模に関わらず、国際標準でいえば指導の基準とレベルはほとんどばらつきがありません。教師の資格も全国共通です。

小中学校および高校にかかる費用は自治体の予算に含まれていますが、この費用の平均25%を政府が補償します。2016年には、フィンランドの生徒1人当たりの学校生活の社会的コストは年間8,025ユーロでした。

総合学校における生徒の学習成果は、全国的評価という手段によって測定されます。該当年齢層から無作為に抽出された約5～10%が、この評価に参加します。

全国共通の指導目標

幼児教育から高校にいたるまで、指導科目の一般的な目標および時間配分は、フィンランド政府が定めます。それらの目標に基づいて、教育文化省傘下にあるフィンランド国立教育局が全国的なコアカリキュラムを決めます。教育提供者の大多数を占める自治体コアカリキュラムをもとに独自の教育内容を決定し、最終的には学校が個別に計画を立てていきます。

これによって、全国の学校に通うすべての生徒がひとつの教科で受ける指導のレベルと範囲は統一されます。一方、地域によって特定の内容を重視したり補足したりする自由度もあります。



無料の給食をすべての生徒に

保育園から高校まで、フィンランドの子どもには温かく健康に良い給食が毎日提供されています。給食にはサラダ、牛乳その他の飲み物、パンが含まれます。

無料の昼食はカリキュラムに含まれていません。給食は子どもの元気を回復し、エネルギーを与え、午後の授業で集中力を持続させる助けになります。また学校給食は健康、栄養、マナーを教える機会でもあります。

特別な食事を必要とする場合も考慮されます。ベジタリアン向けレシピ、オーガニックや環境に優しい食品を毎日提供する学校が増えています。

実は、世界で初めて無料の学校給食を提供したのはフィンランドです。1948年に法制化されて以来、ずっと続いています。

LET'S
GO TO
SCHOOL!

将来に役立つスキルを メッツォカンガス総合学校で学ぶ

フィンランド北部にあるオウル郊外の雪に覆われた森の端に、色とりどりの堂々とした建物群があります。これがメッツォカンガス総合学校です。ここでは7歳から16歳までの生徒1,100名以上の他、教師や特別支援を必要とする生徒のアシスタントなど大人約100名が、勉強や仕事に日々いそしんでいます。

ここは北極圏から数百キロしか離れておらず、1月の寒い朝は日の出の1時間前に学校が始まります。でも、メッツォカンガスの生徒はそんなことは気にかけません。大部分は学校近くにある住宅地から、1年中自転車通学をしています。

校舎に入ると、生徒は屋外用の上着と靴を廊下で脱ぎます。教室や職場に向かう人々が増えるにつれ、あちこちで陽気な挨拶が聞こえます。上下関係がなく平等で、親しみやすい雰囲気です。

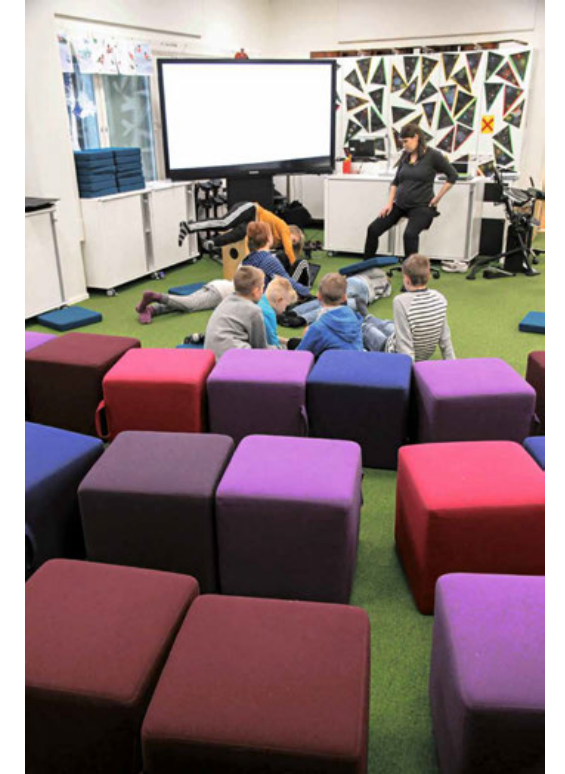
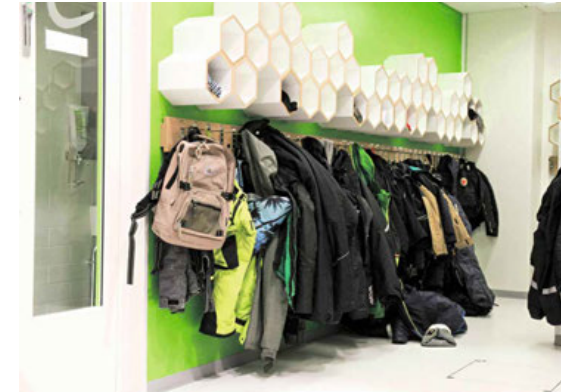
「このように大勢いるので、とても1人ひとりの名前を覚えられませんが、廊下を歩いてみんなに挨拶するよう心掛けています」と、カッレ・コムライネン校長は言います。

コムライネン校長は、校舎の設計と指導内容の計画に最初から関わっていました。2008年に開校し、今も拡張中です。「私たちのメッツォカンガス!」というモットーが示す通り、この学校の指導原則は「公共性」です。

「基礎的なスキルだけでなく、協力、ディスカッション、自立的思考、自主性という、将来に役立つスキルも生徒に教えることを目指しています」と、コムライネン校長は述べます。

メッツォカンガス総合学校は、授業を行う場所を教室から外へ、教材から情報ハイウェイへと移行させる動きを加速しています。新しいコアカリキュラムによって始まった「事象に基づくテーマ別学習」によって、教科を隔てる壁を取り払い、情報を検索・分析・処理することを教えます。すべての指導に、ITスキルの学習とその積極的活用が含まれています。

「生徒の役割は、情報の学習者から情報の生産者へと拡大しています。私たち教師の務めは、彼らを勇気づけ、自分で進路を決めて世界へ旅立てるよう、確かな足場を提供することです」と、コムライネン校長は強調します。



フィンランドの1日の授業時間はOECDの平均より短いですが、効率的に使われています。また宿題の量も国際的な標準を下回ります。



LET'S
GO TO
SCHOOL!

小学4年生、ヒルマ・ヴィスリの典型的な1日

学校がある平日。10歳のヒルマ・ヴィスリは午前7時に起き、自宅で朝食を取ります。ヒルマの母親と父親は学校近くに別々に住んでおり、彼女はそれぞれの家を行き来して過ごしています。学校の始業時刻は通常午前8時15分ですが、午前9時30分に始まる日もあります。ヒルマはいつも自転車で通学しています。

メッツォカンガス総合学校に通う彼女の教室は、2016年に建てられた一番新しいコルピメッツォと呼ばれる校舎にあります。この校舎には伝統的な教室に代わり、ティーチング・モジュールと呼ばれる広さ320平方メートルの大きな部屋が4つあります。このモジュール1部屋の中に、3〜4のティーチンググループと各グループの教師と助手がいて、最高100名まで入れます。用途に応じてスペースを柔軟に変更でき、さまざまな構成のグループや活動状況に合わせてくれます。

この新しいタイプの学習環境を、ヒルマはとても気に入っています。

「勉強のやり方や場所を自分で選べること、閉じ込められないところが最高なの」と、彼女は言います。

ヒルマのクラスでは、その週に行く課題が月曜日に渡されるので、課題をいつどのように終わるかを生徒が自分で計画します。学習内容のかなりの部分がグループやプロジェクトを通じて実施されます。課題の計画を立てて小グループに分ける際は、その生徒個人の特性と希望を考慮します。

多用途に使えるこのスペースには、集中とやる気が感じられます。欧州諸国の情報をコンピュータで検索しているグループがある一方、教師と一緒に英語の動詞を学んでいるグループがあったり、2〜3のグループはゲームを利用した学習を行い、それ以外は読書に集中している、という具合です。特別な支援が必要な生徒がいたり、室内がざわつき始めたりした場合、手が空いている教師や助手が介入します。必要に応じて、静かに学習できる防音空間を設けることもできます。ヒルマが大好きな教

科は美術工芸です。その時間には防湿処理をしたスペースをモジュール内に設けます。

メッツォカンガス総合学校の授業は1コマ60分です。合間の休憩時間は15分で、昼休みはそれより長く取っています。子どもたちは休憩時間に屋外で過ごします。また近所の森を探検することも許可されています。

ヒルマの授業は遅くとも午後1時30分までに終わります。普段は1人で自転車に乗って帰宅します。家に着いたらおやつを食べ、宿題をします。宿題にかかる時間は普通10分ほどですが、もっと長くかかることもあります。自由時間は友だちと遊ぶほか、週に3回ダンスのレッスンに通っています。レッスンに行く時はたいがい母親か父親が送りますが、バスに乗って1人で行くこともあります。

「大人になったら、ファッションデザイナーか女優になりたい」と、ヒルマは言います。

高校

個別進路で、職業スキルを身につける

総合学校修了後、半数近くが普通高校に、半数よりやや多い生徒が職業高校に進学します。どちらにも進学しない残りの約5%は、進路指導を受けます。目標は総合学校修了後、全員が少なくとも普通高校や相当の学業を卒業することです。つまり大学入学資格試験に合格するか、職業高校での職業資格取得を意味します。

普通高校と職業高校は所有者が国・自治体・民間の誰であれ、学校給食も含めて無償です。自分の教科書や文房具などは、生徒が購入する必要があります。生徒は政府から学費援助を受けられるとともに、幅広い社会給付と福祉支援サービスも利用できます。

普通高校と大学入学資格試験

普通高校では、より深い内容の一般教育を継続するのに加え、生徒は専門的な内容も学び始めます。普通高校に出願する際、総合学

校の修了証が使われます。普通高校の生徒は、フィンランドの公用語であるフィンランド語とスウェーデン語の他、少なくとも1種類の外国語、数学・科学、人文科学・社会科、宗教または倫理学とともに、体育と美術工芸を学びます。全員が学ぶ必修教科に加えて、かなり幅広く自由に選べる選択肢があり、希望に応じて選択科目を詳しく学ぶこともできます。

学習はコース別に編成され、生徒自身が選択することで期間が2年から4年に異なります。一部の普通高校のカリキュラムには、音楽、スポーツ、視覚芸術など、特別な重点科目が含まれています。これらの学校の出願基準には、学力のほかに応募者の趣味・関心分野および実技試験も含まれます。

普通高校における学習の集大成が、全国統一の大学入学資格試験です。合格すると、高等教育機関への入学資格が与えられます。試験は毎年春と秋に行われます。志願者は母語

(フィンランド語かスウェーデン語)・文学に加えて、もうひとつのフィンランドの公用語、外国語、数学または人文科学、自然科学の中から最低3科目を選択し、テストを受けなければなりません。年に2回ある試験期間中、数回に分けてこれらの科目を受験してもかまいません。

フィンランドの教育制度で唯一の全国共通の試験がこの大学入学資格試験で、すべての生徒のスキルと習熟度を全国的に評価します。

職業教育と資格

職業基礎教育では、基本的な知識を教え、学生がその職業に就くための準備を促すとともに、さらなる学習、趣味、個人の成長に役立つ重要な知識とスキルも提供します。

職業学習は、総合学校修了直後か普通高校卒業後、あるいは就労中でも開始できます。職業資格を取得すれば、大学および応用科学大学に進学できます。

基礎職業教育は、職業高校、国民成人学校、見習い訓練、あるいは職場での実習を通じて、数種の分野でさまざまな提供者がいます。通常の学習期間は2～4年で、生徒の教育的背

景などによって変わります。また生徒はさまざまな資格を取得することで、自分の実力を証明できます。これらの資格も能力に基づいて与えられます。

二重資格と個別の進路学習

多くの自治体では、普通高校と職業学習の両方を同時に修了できる機会が与えられています。並行学習は3～4年続き、最後に大学入学資格試験と職業資格試験の両方を完了することになります。職業学習を受ける生徒は、個別の学習内容を自分で計画し、複数の学校の単位を含めることもできます。





大学

高レベルな研究や 実用的学習を目指して

普通

通高校を修了した後、生徒は大学や応用科学大学に進学します。出願は主に共通入試応募制度を通じて行われ、普通高校の修了証、入学試験、適性試験、またはこれらの組み合わせによって学生の選抜が行われます。

応用科学大学

応用科学大学では、高度な能力を必要とする実的な学習を提供します。取得可能な学位の主な例としては、経営学、工学、情報技術、ソーシャルサービス、文化・芸術、看護・保育などがあります。

応用科学大学における学習期間は3年から4年半で、1学期の実習期間が含まれます。学士課程を修了後、少なくとも3年間の就労体験がある学生が、修士課程に出願できます。フルタイムで学習した場合、修士課程を修了するまで1年から1年半かかります。一定の条件を満たせば、さらに大学で科学研究を続けることもできます。

大学

フィンランドの大学はあらゆる分野の科学と芸術を代表しており、大学網は全国に広がっています。最大かつ最も歴史があるのがヘルシンキ大学です。1640年に創立され、現在の学生数は34,000人を超えています。ヘルシンキ大学は世界のベスト大学ランキングなどの国際比較調査で上位100以内に繰り返し選ばれています。

ほとんどの学問分野で、学生は学士課程を3年ほどで修了します。その後修士課程に進み、通常2年で修了します。

大学や応用科学大学で修士課程を終えた学生は、ライセンシエート（修士と博士の中間学位）や博士課程に進んでさらに学習を続けることができます。大学では、成人教育およびさまざまな研究やコンサルティング・サービスも提供しています。

学習の財政的・社会的支援

フィンランドおよび欧州連合（EU）／欧州経済領域（EEA）諸国の国民は、高等教育における学習を無償で受けられます。一定の条件を満たせば、学生は学資援助、補助金付きの住宅サービス、手頃な価格の食事、地元公共交通機関の割引、健康管理サービス、その他の支援サービスを利用できます。

教育水準が高いフィンランド人

フィンランドには14の大学と25の応用科学大学があり、高度な職業スキルを必要とする学生に準備教育を提供します。現在、30～34歳のフィンランド人の約4割が大学での学位を取得しています。

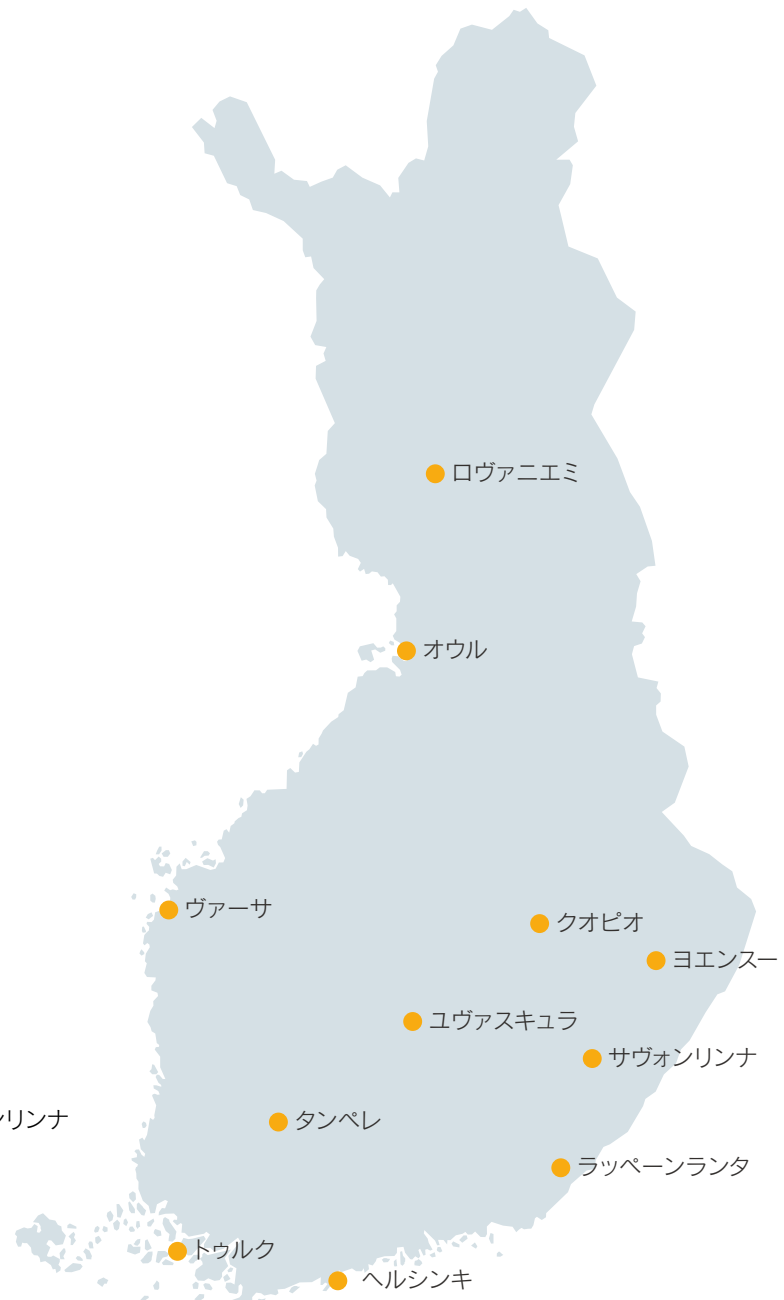
フィンランドの大学

大学

1. アールト大学
2. ヘルシンキ大学
3. ヘルシンキ芸術大学
4. ハンケン経済大学
5. トウルク大学
6. オーボ・アカデミー大学
7. タンペレ工科大学
8. タンペレ大学
9. 東フィンランド大学
10. ラッペーンランタ工科大学
11. ユヴァスキュラ大学
12. ヴァーサ大学
13. オウル大学
14. ラップランド大学

都市

ヘルシンキ
ヘルシンキ
ヘルシンキ
ヘルシンキ、ヴァーサ
トウルク
トウルク
タンペレ
タンペレ
ヨエンスー、クオピオ、サヴォンリンナ
ラッペーンランタ
ユヴァスキュラ
ヴァーサ
オウル
ロヴァニエミ



あらゆる人々に平等の機会を

スキルと知識を深める

フィンランドでは、自分を教育して知識を高めたり、新たなスキルや趣味を追求するための機会があらゆる人々に与えられ、費用は無償または安価です。

子どもと若者の芸術基礎教育

芸術における基礎教育では、基礎学習を終えた生徒に、自己表現するスキルとともに、自分が選んだ芸術分野の職業教育や高等教育に進学するための学習を提供します。この基礎芸術教育を提供するのは、400 近くある音楽学校および視覚芸術、ダンス、演劇、文学、工芸・デザインの学校です。これらの機関における指導には一定の目標があり、学習内容は段階的にレベルアップしていきます。学期毎に学費を支払いますが、各機関の費用の大部分は政府と自治体が負担します。フィンランドではすべての子どもと若者の約 12%が基礎芸術教育を受けます。

誰にでも開かれた成人教育

成人教育を提供する教育機関は、ほぼすべての自治体に少なくともひとつあり、社会的にサポートされています。この誰にでも開かれた成人教育には長い伝統があり、最初の国民成人学校が設立されたのは 19 世紀末より前のことでした。

成人教育は誰でも受けられます。自分が住んでいる町の成人教育センターで外国語、写真撮影、ギター演奏などの科目を受講すると、費用は通常 1 コースにつき数十ユーロほどです。夏には夏期大学や国民成人学校で、多彩で実務的な学問を学べます。成人教育学校は、自分に合った職業を模索している人々や、基礎教育または普通高校を終えていったん学習を休止している人々向けに、1 年間のコースを設けています。

成人教育の目的は、個人の多様な成長と能力をサポートし、コミュニティの中で役割を果たせるようにすること。またフィンランド社会の民主主義、平等、多様性を推進することでもあります。

成人教育の内容は教育機関が自ら決定し、そこでの学習は学位につながりません。それらの機関を運営するコミュニティは、さまざまな思想的・宗教的見解をもっていたり、地元や地域教育ニーズが基盤になっている場合があります。



教室を飛び出して世界へ

2016年に導入された全国的なコアカリキュラムは、学習環境の開発を重視しています。伝統的な教室に加えて、校外に移動しての指導・学習が増えています。屋外で授業が行われ、美術館、博物館、企業その他への見学が実施されています。ゲームなどバーチャルな空間も、学習環境に含まれます。学校での日常活動における技術の重要性が高まっており、あらゆる教科の指導に多様な方法が利用されています。

問題解決型の学習、対話、責任

カリキュラムは広範囲におよぶ横断的な能力とともに、対話力と表現力にも脚光を当てています。生徒は学習に自己責任を負う方法を教わり、自分でゴールを定め、問題を解決し、目標と結果を見比べて成長を自己評価します。個人の体験、感情、興味、そして他者との双方向の対話は、学習の土台作りに大切な役割を果たします。教師は生徒が生涯にわたって学習を続けられるよう導きます。教育内容はまた、生徒がきちんと日常生活を送り、自分のことは自分でできる能力がつくよう配慮されています。

マルチリテラシーと積極的市民意識

読解力と言えば従来は書物の文章を読むことでしたが、今は範囲が広がってマルチリテラシーへと進化しています。つまり、さまざまな形式、環境、状況で、言語・視覚・聴覚・運動感覚といったさまざまなツールを使い、情報を生み出して解釈できる能力を指します。これは、生徒が絶えず変化する周囲の世界を理解し、その文化的多様性を知覚するのに役立ちます。マルチリテラシーは批判的な思考および学習法の開発をサポートし、ICTスキルと密接にリンクしています。

また基礎教育も、職業人生に役立つスキルを提供し、起業家となって社会に参加し、社会還元できるよう指導します。

総合学校 全員に共通の教科：

母語と文学
もうひとつの公用語
(フィンランド語またはスウェーデン語)*
外国語
算数・数学
環境学習

*) フィンランドはフィンランド語とスウェーデン語を公用語とする二言語国家です。フィンランド語を母語とする生徒はスウェーデン語をもうひとつの公用語として学習し、スウェーデン語を母語とする生徒はフィンランド語を学習します。

**) 原則として総合学校の生徒は自分の宗教の教育を受けますが、どの宗教にも属していない場合は、倫理学を学びます。

この他にも選択科目として外国語、芸術、実践的な教科、学校が提供する他のコースなどから教科を選ぶことができます。

生物
地理
物理
化学
保健
宗教または倫理 **
歴史
社会
音楽
視覚芸術
工芸
体育
家庭科

成功のカギは？

フィンランドの教育制度の成功は、文化的な特性と全国的なソリューションに基づくもので、日々の教育の質を高く保つカギとなっています。

教育は国の最優先項目

フィンランドでは教育が高く評価され、国民は国を成功に導く一番の立役者として、教育の重要性を信じています。教育および知識の力に対する信頼は、今も国民の自己意識とアイデンティティに欠かせません。また教育は、グローバル化がもたらす課題に対処する最も有効な手段と考えられています。この考えは基礎教育だけでなく、それ以外の教育レベルにも導入されています。

高度な教師育成

総合学校の教師には修士号が必須です。原則として1～6学年では、担任が全教科を教えます。通常彼らは教育学の修士号を保有して

おり、教える能力が重視されます。総合学校の7～9学年および高校では、その教科の修士号を保有し、教育学を履修済みの教師が専門教科を教えます。

教員養成（教職課程）は非常に人気があり、高い評価を受けています。実際に受講できる人数の5倍以上もの応募者が集まります。

教師が指導方法を選べる

教師は全国共通のコアカリキュラムに従う必要がある一方、教室での指導方法と学習教材を選ぶ自由もあります。教師は、生徒のニーズと強みを理解しながら、共通の目標も尊重する「独立した専門家」です。

実際の授業を可能にするのに大切なのが、質の高い学習教材です。フィンランド語の言語圏が小規模で、スウェーデン語を話す少数派はさらに少ないという現状にも関わらず、教

科書や学習教材の作成が非常に重視されています。電子フォーマットやオンラインで利用できる教材が、ますます増えています。

「地元の学校で学ぶ」という理念と信頼の文化

地元での学校教育という理念は、ほぼすべての子どもが最寄りの学校に通うことを意味します。これによって、家族の社会的地位にともなう学校の差別化を防ぎます。

学校は高い信頼を維持しているため、親たちはおおむね地元の学校に満足しており、総合学校と並存してエリート校が発展するという図式は見られません。許可を得た民間の学校も実際には存在しますが、それらもやはり国の資金援助を受け、コアカリキュラムに従っています。

管理する代わりに勇気を与える

フィンランドの教育は、洞察力を通して学ばせることと、成績評価の際は勇気づけて励ますことを重視しています。継続的な評価や、生徒同士を比べて成績を格付けしたり競争させたりすることを基盤としていません。その代わりに、個々の生徒に最も有効な学習方法を見つけることと、学習上の困難をかかえている生徒の支援に、指導の焦点を合わせています。全生徒に進学の機会が提供され、進路に行き止まりはありません。

福祉社会からのサポート

すべての子どもに対する平等な学習機会の提供をサポートしているのが、生徒への包括的な学校保健サービスと社会福祉です。



世界の頂点に

さまざまな国際比較調査で、フィンランドの学校は高く評価されています。たとえば 15 歳を対象に3年ごとに行う OECD の学習到達度調査（PISA）では、フィンランドは常にトップクラスにいます。

科学的リテラシー 全参加国のなかでフィンランドが位置する順位	
2015	5
2012	5
2009	2
2006	1
2003	1
2000	3

読解力 全参加国のなかでフィンランドが位置する順位	
2015	4
2012	6
2009	3
2006	2
2003	1
2000	1

数学的リテラシー 全参加国のなかでフィンランドが位置する順位	
2015	13
2012	12
2009	6
2006	2
2003	2
2000	4



必要とする子どもに
いつでも与えられる支援

フィンランドの学校制度の強みは、特別な助けが必要な生徒への支援方法です。子どもはすべて、その素質に関わらず、質の高い教育を受ける権利があるというのが基本原則です。

特別支援のニーズが生じた場合、生徒にはそれをすぐに受ける資格があります。最も一般的なのは、少人数グループやマンツーマンでの補習です。グループ学習に取り組んでいる間でも、各生徒の条件によって個人に合わせた指導を受ける権利があります。

大半の学校には特別支援に対応する教師がいる他、ほとんどすべての学校に補佐する助手がいます。もし広範囲におよぶ恒常的な学習障害が生徒にあると認められた場合、個人の事情に合わせた学習計画が立案されます。

障害が軽度または中度である場合、他の生徒と同じクラスで学習しますが、学校に追加の人員が配置されます。

発達障害に加えて、感覚障害、身体的障害、その他の心身の健康に問題がある生徒には、特別な教室や学校があります。それらの生徒の義務教育期間を11年に延長する場合があります。

移民の子どもの学校教育は、多様な支援が用意されています。フィンランド語やスウェーデン語が全然あるいは少ししかできない移民の子どもには、少人数グループでの予備指導が提供されるとともに、調整された学習計画に従ってフィンランド語を学ぶ機会があります。大都市では、移民の子どもが母語の指導を受ける機会もあります。

フィンランド教育の100年

フィンランドでは19世紀末に向けて、国を成功に導くけん引役として教育の優位性が確立されました。そして、フィンランドには啓蒙された読み書きができる市民と文芸文化が必要だという、国民の強力な自覚につながりました。すべての子どもに一般的な初等教育を提供する小学校が登場したことに、この自覚が表れています。

20世紀初頭、フィンランド各地の自治体に小学校が多数設立されました。1921年に義務教育法が成立し、小学校で最低6学年分は修了することを、すべての生徒に義務づけました。最初の全国カリキュラムが作成されたのは1925年です。フィ

ンランドには1800年代という早い時期に中等学校と高等学校がありましたが、数が大幅に増えたのは第二次世界大戦後です。

1970年代に教育制度の改革が行われ、初等・中等学校という制度が、総合学校制度に置き換えられました。総合学校は、主に自治体が提供する9年間の基礎教育で構成され、義務教育の期間も9年に延長されました。この学校改革および総合学校導入の目的は、家族の居住地や家族の社会経済的地位に関わらず、すべての子どもに平等で無償の基礎教育を確実に提供することでした。

1921

義務教育法成立。7～13歳のすべての子どもが対象

1948

学校給食法により、昼食の無償提供が実現

1958

義務教育を2年延長

1971

学校週5日制を導入

1972

「総合学校」の改革がスタート

2006

コアカリキュラムの改革

2016

コアカリキュラムの新たな改革

05. フィンランド教育の最新事情

現代的な学びをリードする国

フィンランドは 2025 年に向けた野心的なビジョンで、誰もが高い学習意欲をもつ国になることを目指しています。国民の知識・教育水準が上昇したことで、機会の平等が進み、社会の刷新を支えています。フィンランドは教育、知識、そして現代的な学びをリードしています。

現在の改革は、幼児期の教育から始まって最上位の科学研究に至る、知識の連鎖全体を網羅しています。フィンランドにおける教育の開発は、常に関係する利害関係者全員が協力して行われます。

総合的な教育

新しいコアカリキュラムは 2016 年8月から学校に導入されています。新しい総合学校プログラムの焦点は、新たな教授法、新たな学習環境、そして教育のデジタル化です。この改革は教師のスキルと経験を十分活用し、彼らの教授法にかなりの自由を認めています。地域に合ったソリューション、創造性、実験が奨励されています。フィンランド国立教育局と連携して運営されているイノベーションセンターが、ベストプラクティスの効

率的な普及を確保します。また教師教育を刷新するため、フィンランド教師教育フォーラムも設立されました。

生徒に身体を動かすよう奨励する活動では、運動量の増加と、座っている時間の削減を目指します。スクールズ・オン・ザ・ムーブ (Schools on the Move) は、全生徒が少なくとも1日1時間の運動をこなすプロジェクトです。また子どもと若い世代には、芸術・文化により積極的に触れられる機会も提供されます。

職業教育

職業教育の改革は、ここ数十年間にフィンランドで行われた中で最も広範囲におよぶもののひとつです。職業資格を定義する要素は、もはやカリキュラムの長さではなく、学習の成果です。目的は、職業人生のニーズに対応し、キャリア全体を通じて学習を継続する能力を強化する、柔軟な職業教育システムを構築することです。

高等教育機関と科学

柔軟な学びの進路は、学生が学位取得後も、仕事と学習を両立しやすくしています。将来フィン

ランドの高等教育機関は、通年で授業を行うようになるでしょう。またデジタルな学習環境を推進し、オンラインで指導を提供することも、学習プロセスを促進するでしょう。

研究の質を向上させ、真に国際的な高等教育機関のコミュニティを構築するために、新たな取り組みが行われています。高等教育機関の合併はアールト大学を誕生させ、計画中の新生タンペレ大学のような、新しく刺激的なソリューションにつながっています。

フィンランドには充実したイノベーションシステムがあり、高等教育機関と企業との連携のさらなる強化を目指しています。スタートアップが盛んな環境の醸成に成功しているのは、高等教育機関に所属する学生が、活発な起業家精神をもっていることが大きな理由です。それは、ヘルシンキ発のスタートアップイベント「スラッシュ (Slush)」が世界各地に広がっていることからわかります。



06. 未来に向かって

率先して課題に取り組む

フィンランドの教育制度は、世界トップクラスの質を誇っています。フィンランドの教育制度を海外に紹介し、それに関する著作を数多く刊行する**パシ・サルベリ**教授は、国際的に高く評価されています。将来の課題に対応できるようにフィンランドの学校をどう改良すべきか、サルベリ教授は次のように述べています。

双方向の対話、協力、問題志向型の学習

「現在学校に通っている子どもたちが将来就くことになる職業や仕事は、大部分がまだ存在していません。学校はもはや、今までと同じやり方で若者に職業人生に関する指導をすることはできません。職業や状況に左右されないスキルと能力を、学校で学ぶことが重要です。それにはコミュニケーション、対話、リーダーシップ、共感、創造的な問題解決などが含まれます。問題志向型の共同学習、そしてディスカッションのスキルを教えるのは良い方法なので、さらに伸ばすべきです」

特別なニーズへの配慮 平等な機会と指導を子どもたちに

「2015年のPISA（OECDの学習到達度調査）の結果を見ると、以前はフィンランドの教育の強みと考えられていた平等の割合が低下しています。これは気掛かりであり、改善策を見つけるためには、この問題の社会的な根本原因を深く理解する必要がありますでしょう。たとえ経済状況が厳しい時でも、子どもたちのために特別な教育と余暇活動を行うのに十分な資金を、学校に保証すべきです。現在では、これらを親たちの経済力に依存する傾向が高まっています。また、とくに大都市の学校が、良い学校と悪い学校に分かれるのを確実に防ぐべきです」

男児に対する読書の動機付け

「国際的な学習調査を見ると、フィンランドは男児より女児のほうが成績が良くなっています。もし学校にいるのが女児だけなら、我が国はシンガポールと並んでPISA調査の最上位に入るでしょう。この背景には、男児がもはや娯楽のための読

書をしなくなっている、という事実があります。彼らも以前はそうしていたのですが、このことが読解力の急激な低下という結果につながっています。若者、とくに男児がコンピュータに時間を費やしていることが、学校での学習効果が低下している一因です。男児の学習効果を以前の水準に戻すためには、自宅と学校の両方で効果的に時間を管理する必要があります」

イノベーション、そして突飛なアイデアにも寛容であること

「教育はフィンランドでも他国でも常に変化しているので、以前は上手くいった古いモデルを使って未来のニーズを満たすことは不可能でしょう。フィンランドはイノベーションの国で、面白いアイデアを受け入れる余地がある開かれたコミュニティを誇っています。そのため、教育の新たな方向性を発見するのに最高の場所になるでしょう。しかし、それに成功するためには緊密な国際協力と善意が不可欠です」

